

「創ってよかった」 2024 08

奈緒ちゃん、51歳の誕生日の頃から始まった『大好き～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』4週間の封切り上映が、ようやく終わった。

草臥れた。

お客さんの入りに一喜一憂する日々だったけど、この暑期中、足を運んでくれる方々を思うと、ありがたいような、申し訳ないような毎日だった。

たかが映画、されど映画…。今回もまた、お客さんの感想に励まされた。ああ、創って良かったなあ、と思わせてくれました。

**「お母さんの全世界に贈る遺言ですね。
冒頭から涙がジワジワと
止まりませんでした」**

**「障がいがあるとか無いとかではなく、
“生きる”とはどういうことかを
深く考えさせられました」**

**「奈緒ちゃんとお母さんの生活に、
幸せが滲み出ている、とてもステキでした」**

**「お母さんのピアノの音色がとても優しくて、
生きてこられた人生が、
そのまま音色から伝わってくるようでした」**

**「2回目です。涙が止まりませんでした。
命の限りをひしひしと感じ、
切なくて切なくて、その時間の有限さに、
命の尊さを感じます。
時間が無限だったらいいのに。
別れる日なんてこなくていいのに。
ずっとずっと、一緒に居られたらいいのに」**

トークで感想を読み上げて、「映画より、感想の方がいいんじゃないかなあ…」と言ったら、お客さんに頷かれてしまった。映画が感想の言葉を引き出しているのだから、きっと、映画もいかに違いないと思いたいけど…。

てんかんと知的障がいを持って生まれ、生きてきた姪っ子、奈緒ちゃんとお母さんの50年…、と言うと福祉の映画とだけ捉えられてしまうかもしれないが、映画を観た多くの人が、「これは、家族の映画ですね」と受け止めたり、「“生きる”とはどういうことかを深く考えさせられた」と言ったり、「いのちは生きる方向を向いている」というナレーションが心に残りました」と語ってくれたりします。

私は「『大好き』というタイトルの通り、奈緒ちゃんとお母さんのラブストーリーです…。“相思相愛”っていいよね」と、創り終えた今の素直な気持ちをトークの時に喋ります。同時に、お母さんが奈緒ちゃんを育てる中で出逢い、身に付けて行った思い、言葉に、耳を澄ませてほしいということも…。

映画の中で、何度となく「奈緒に育てられた…」と呟くお母さん…。「神様が私にプレゼントしてくれたんだ。大変だったけど、でも奈緒に障がいがあったよかった」と言い切ります。

『大好き』封切りと時を同じくして報じられた「旧優生保護法は憲法違反だ」という最高裁判決を過去の問題とせず、今のこと、これからのこととして受け止めることと、映画『大好き』の50年の記憶を受け止めることは、繋がっているように思えてならない。

「優生思想」をナチズムの話、過去の遠い所での話と捉えるのではなく、「いのち」を選別するのではなく、「いのち」を本当に大切にする社会を想うために捉え直すこと…

「いのちは生きる方向を向いている」のだから。

奈緒ちゃんは繰り返し繰り返し語りかけます。

「やさしくなあに”でしょ、

“やさしくなあに”って言わなくちゃ…」

目を瞑り、手を合わせます。